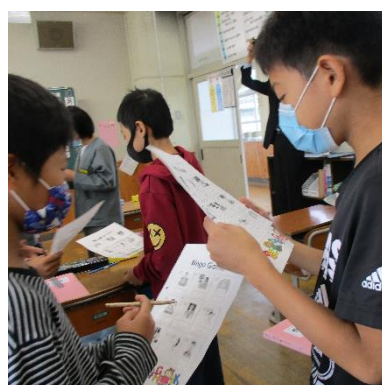




英語教育の充実に向けて

(英語教育改善プラン研究のまとめ)



兵庫県マスコットはばタン



兵庫県教育委員会

は じ め に

学習指導要領の改訂により、中学年（３・４年）で外国語活動が、高学年（５・６年生）で外国語科がスタートしました。学習指導要領では中学年において、音声面を中心とした外国語を用いたコミュニケーションを図る素地となる資質・能力を、高学年において「読むこと」、「書くこと」を加えた五つの領域の言語活動を通して、コミュニケーションを図る基礎となる資質・能力を育成することが求められています。

そこで、本県の小学校英語教育の推進に資するために令和元年度から英語教育改善プラン推進事業を実施し、新学習指導要領に基づく、言語活動を中心とした効果的な指導方法及び「小学校外国語教育指導用映像資料」を活用した効果的な校内研修等の在り方について研究を行ってきており、本冊子に今年度の研究協力校の取組をまとめました。

各小学校におかれましては、本冊子を英語教育の一層の充実に活用いただくことを期待しています。

また、各中学校におかれましては、小学校での取組を知っていただき、系統的な授業実践の参考にしていただくとともに、小中連携をより充実させていただきますようお願いします。

最後になりましたが、本誌の作成にあたりご協力いただきました佛教大学赤沢真世先生をはじめ研究協力校・教育委員会、その他関係の皆様にご感謝申し上げます。

令和３年３月

兵庫県教育委員会

目 次

I	外国語教育における評価について	・・・	1
		佛教大学 准教授 赤沢 真世	
II	研究協力校の取組	・・・	4
1	パフォーマンス評価の在り方		
	(1) 西宮市立甲子園浜小学校	(2) 多可町立中町南小学校	
	(3) 佐用町立上月小学校	(4) 香美町立兎塚小学校	
2	新学習指導要領に基づく指導方法の工夫	・・・	12
		香美町立兎塚小学校	
		佐用町立上月小学校	
3	学びの接続を意識した小中連携	・・・	14
		多可町立中町南小学校	
4	教員の英語力向上に向けた取組	・・・	15
		西宮市立甲子園浜小学校	
III	小学校外国語教育指導用映像資料	・・・	16
◆	中学校教員に対する研修	・・・	18

外国語教育における評価について

佛教大学 准教授 赤沢 真世

令和2年 11 月 19 日(木)実施 英語教育改善プラン推進事業第2回英語教育推進員研修会の赤沢先生の講義より

1 外国語科の評価

令和2年度から小学校において新学習指導要領が本格実施され外国語が教科となりました。教科になるということは同時に評価をすることが必要になります。外国語科においては「知識・技能」、「思考・判断・表現」、「主体的に学習に取り組む態度」の3つの観点で評価を行います。「知識・技能」については各単元で求められる新出単語や新出表現等を授業の中で繰り返し聞いたり、やりとりをしたり、発表メモを書いたりといった活動を通して定着を目指し、評価は行動観察やワークシート、教科書への書き込み等によって行います。

「主体的に学習に取り組む態度」は学習に関する自己調整を行いながら粘り強く知識・技能を獲得したり、思考・判断・表現しようとしたりしているかどうかという、意志的な側面を捉えて評価をします。「思考・判断・表現」については各教科等の知識及び技能を活用して課題を解決する等のために必要な思考力、判断力、表現力等を身に付けることを目指し、単元の最終課題として位置づけられたポスターなどの成果物、発表、インタビュー活動などから表現を評価する、いわゆるパフォーマンス評価を行います。伝え合う場面・発表する場で「よりよく伝え合っている」姿や「相手に効果的に自分の考えを伝える」姿を評価することになるのですが、子どもがどんな姿になっていればA評価なののでしょうか。どんな観点があるのでしょうか。そこを考えるうえでルーブリックの作成が有効になってきます。

ルーブリックとは

成功の度合いを示す数レベル程度の尺度と、それぞれのレベルに対応するパフォーマンスの特徴を示した記述語(評価規準)からなる評価基準表。【文部科学省出典資料より】

2 ルーブリック

単元で育みたい子どもの姿を想定する過程で、どのような姿になったらAなのか、どのような姿になればBなのかということをそれぞれが言っているにもかかわらず共有しにくいものです。そこで、共有しやすくするためのツールの1つにルーブリックがあります。ルー

表1 発表(presentation)における一般的なルーブリック例

	(知識・技能) 英語表現	思考・判断・表現 発表内容	思考・判断・表現／主体的に学習に取り組む態度 伝える工夫(発声、動作)	※ポスター・発表資料
A	当該単元の表現だけでなく、伝える目的や場面、状況や相手に応じて、これまでの既習事項を組み合わせ用いている。	相手に伝わりやすいように意識して、伝える内容やその順序を考えている。自分の思いや考えを効果的に伝えた内容となっている。	豊かな表情で、アイコンタクトやジェスチャーを効果的に用いて伝えられている。伝える声の大きさやスピードが的確である。	相手の興味を促したり、理解しやすい内容やレイアウトになっていたりする。相手のよりよい理解のために、話す順序に工夫がみられる。
B	当該単元の表現を適切に用いている。	自分の伝えたい内容を伝えることができる。	アイコンタクトやジェスチャーを何とか用いようとしている。聞こえる声で伝えている。	相手に伝わるようにレイアウトや内容に工夫がみられる。
C	当該単元の表現を適切に使うには至っていない。	自分の伝えたいことを伝えるのに苦労している。	アイコンタクトやジェスチャーを用いようとせず自分の考えを話している。	例で示されたものをそのまま用いて自分の発表にしようとしている。

ブリックはただ作成すればよいというわけではなく、作成する過程でA評価の姿を考えることや、作成した後でルーブリックに書かれていることに対して実際にはこうなしてほしいという具体的なイメージを持つことが大切です。ルーブリックというのは子どもの成果をみとる規準・基準です。ただし量的なものというよりは質的な特徴や姿を言葉で表したものです。本来ルーブリックというのは教員が願う到達度ですので、まず設定した後、子どもたちの作品や姿を見ながら調整していくものです。作成して終わりではなく、作成してからの調整・修正が大事です。



図1 ルーブリック作成のイメージ

一般的にルーブリックは抽象的です。例えばA評価の姿として「よく伝えている」、B評価の姿として「おおむね伝えている」といったように書かれていたりします。これで意味があるのかなと思ったりもしますが、大事なのはこれを示したうえで教員が具体例を子どもに示すということです。ではもっと具体的な言葉で姿を書けばどうでしょうか。例えばA評価の姿として「〇〇の表現を使う」と具体的な文（単語）を書くとしみましょう。これについては子ども達にとって「この文（単語）が入っていればAなんだ。」と分かりやすいです。ただし、あまり具体的にしすぎるとこれを超える豊かなものがあつた場合に評価が縛られてしまうことになるので注意が必要です。大事なのはAの姿のイメージを具体的に教員も子どもも持っているかどうかです。「これまでの既習事項を用いている」と書いた場合、どのような姿が出てくるのかを教員があらかじめ想定しておくことが大事です。教員がまず想定しておくこと、そして、子どもも想定ができるような声かけが必要です。

授業の中で具体的にどう扱うかについては、まず授業の初めに学級全体でルーブリックを確認することから始めましょう。この時にルーブリックは見せなくてもよいし、見せても教員用のルーブリックだけでよいと思います。子ども用があれば見せてもよいですが絶対に見せなければならないものでもありません。教員のみが把握し、子ども達には教員が実際にA評価の姿を演じて見せて、学級全体に確認し、どんなことがよかったか、またはよくない例を見せて、どうすればよくなるかを子どもたちと協議すると、よく分かるようになります。そういう意味で学級全体に示すというのが大事になります。さらに子どもが分かる表を示している例もあります。表に加え教員が具体的な例を実際に見せることで、自分が発表したときや友達の発表を見たときの相互評価を通して学習の改善に向けた次の視点が見えてきます。

3 ルーブリック設定の留意点

ルーブリックはぜひ一度作って実践してみてください。その時には、子どもと一緒に評価をしてみてほしいと思います。すると、このルーブリックには書かれていないけれど、もっといい姿を見つかったり、発表はすごくよかったのにルーブリックに合わせるとAにならないという、感覚のずれが見つかったりすると思います。そこで、子ども達と一緒に改

訂し一緒に作っていくことができるとよいと思います。ただ、目指す姿というのは教員が確固としたものをもっていないと子どもに振り回されてしまうことがあるので、どういう姿になってほしいかを教員がきちんと明確にしておく必要があります。

また、発表の時に、ルーブリックを手元に置きながら行うことがあります。しかし、そうすると発表をきちんと見ずに、表ばかりを見てしまうので、発表の時ややり取りの時はルーブリックをいったん忘れてもよいと思います。発表の後で振り返りを行うときにルーブリックを出して「あ、相づちやリアクションを忘れていた…」と気付けばよいと思います。ルーブリックをずっと抱えて活動しているのは少し違うのではないかと思います。

また、ルーブリックは数量的に示すのには不向きかと思います。例えば相手意識に対して「ジェスチャー、アイコンタクト、相づち、質問」の項目があり、そのうち4つができたならA、そのうち3つができたならBと決めていたとします。しかし、この4つは同じ重さかといえそうですではありません。相手に質問するという事は難しいですね。もちろん4つともできていてAというのは全てできているので納得ですが、「質問」「相づち」「アイコンタクト」の3つができていて「ジェスチャー」ができていなかったのもBという評価になる、というのはどうでしょうか。「ジェスチャー」は絶対必要だということではないので、そのような点で実際にやってみると「あれ、このルーブリックちょっと変だな」ということが見えてくると思います。「ちょっと変」を改訂していくことにルーブリックのよさがあります。

4 学習評価＝子どもによる子どもの学習評価

いま求められているのは「指導の評価」ではなく「学習評価」と言われています。子どもが学習する主体です。また「学習」という言葉の主語も子どもです。子どもの学習の評価なので、究極は子ども自身が自己評価できたらよいと思います。ただし、自己評価した内容と教員による評価がきちんと重なっていなければいけません。また、教員の評価というのは子どもの自己評価力をつけるための評価であってほしいと思います。大事なことは子どもが自分自身のパフォーマンスを振り返った時に、自分が最初できなかったけれど、できるようになったこと、変容・成長を自分自身が見つめられることです。子どもにとっての「学びの可視化」が大切です。ルーブリックの表も学びの可視化につながる1つの方法です。

よくワークシートをファイルに蓄積していったりしますが、ただファイリングして終わりにになっていないでしょうか。ある時に最初の発表のスク립トと最終的なスク립トを見比べさせて、「たくさんの情報が入ったな」とか「こんなことも言えるようになったな」とか「最初はここにジェスチャーがなかったけれどジェスチャーを付けてよくなったな」のように子ども自身がワークシートの変容を見られるような機会があればよいです。もしICT機器が使えるのであれば発表の様子を撮影しておいて、教員が評価で使うことに加えて、子ども自身にその変化を見てもらうのも有効です。「〇〇さんは、最初の発表はこうだったけど、こんな風にアイコンタクトできるようになったよ」というのを全体で見せてあげるなどの活用ができるのではないのでしょうか。

このように、子ども自身が学びを的確に評価できるための工夫が今後求められていくでしょう。

西宮市立甲子園浜小学校



研究内容

指導と評価の一体化を意識した児童と教員の評価規準の共有

1 具体の取組の内容

新学習指導要領における学習評価では、目標に準拠して設定された評価の観点として、「知識・技能」、「思考・判断・表現」、「主体的に学習に取り組む態度」という3つの観点が設定されている。指導要録のための学習評価を行う際には、まず目標を設定し、その目標に対する児童の学習状況がどの程度であるかを3つの評価の観点（「知識・技能」、「思考・判断・表現」、「主体的に学習に取り組む態度」）から把握し、3段階（A「十分満足できる」、B「概ね満足できる」、C「努力を要する」）で評価する。その上で、観点別学習状況の評価を総括し、3段階（1～3）の評定を記録する。

評価について検討するにあたり、外国語科では「児童がつけたい力」＝「評価する内容」と捉えることができると考えた。そこで、教科化を受けて、指導と評価の一体化を目指し、一学年の学習を学期ごとに3つの大単元に分けて、指導と評価を行うこととした。評価方法は主として行動観察、ワークシートの点検（休校中の家庭学習など）、教科書の点検（授業での活動など）、振り返りシートの点検（単元末に実施）といった従来の方法に加えて、児童一人一人の学習状況を把握し、評価する方法として、パフォーマンス評価を用いることとした。

5・6年生の2学期には、大単元を通して、一人ずつ、ペア、グループでスピーチやプレゼンテーションをする場面を設定し、主に「思考・判断・表現」、「主体的に学習に取り組む態度」の観点から判断した。なお、5・6年生ともに数回スピーチをする活動を実施し、パフォーマンス評価を行った。学期末には、5年生は「インタビューした先生を紹介しよう」というテーマでのグループプレゼンテーション、6年生は「小学校での思い出を伝え合おう」というテーマで一人ずつプレゼンテーションを実施し、パフォーマンス評価を行った。

2 成果

パフォーマンス評価では、事前にルーブリックによる評価規準を示すことで、教員によってなされる評価を明確にする必要がある。6年生「小学校での思い出を伝え合おう」を例にすると、「思考・判断・表現」の観点で3段階評価をするにあたり、教員として以下を規準と考えた。そして、プレゼンテーションの練習を開始する前の段階で、児童に提示し共有することとした。（授業時には、児童に伝わりやすい言い回しを用い、できるだけ具体例を挙げて説明をした。また「テスト」という名称は用いず、「小学校での思い出を伝える発表会をしよう」と伝えることで、緊張感を抱かせず、いつもの授業と同じように取り組めるよう配慮した。）

- A…ふさわしい表現方法を用いて、伝える内容を選んだり、順番を工夫したりしている。
 また、相手を意識して伝えている。
- B…ふさわしい表現方法を用いて、伝える内容を選んだり、順番を工夫したりしている。
- C…ふさわしい表現方法を用いて、伝える内容を選んだり、順番を工夫したりしていない。

これらの規準を提示し共有できたことにより、以前と比較して、児童は伝えようとする内容を整理したり、順番を吟味したりするようになった。また、その内容を伝えるため適切な表現を自発的に調べたり、より相手に伝わりやすくするための方法を考えたりする姿も見られた。結果として、プレゼンテーションでは、多くの児童が「つけたい力」をつけられたと感じた。同様に5年生も、教員へのインタビューによって得た情報を、相手により分かりやすく伝えることができるよう工夫する児童の姿が見られた。5・6年生児童の意識の変化は、単元末に実施した振り返りシートの記述からも読み取ることができた。

なお、これらの実践では、一学年の学習を学期ごとの大単元に分けたことで、大単元の学習をスタートする前の段階で、単元末のゴールとなる活動をイメージさせることができた。今回は主に教科書の写真、モデル動画、教員の説明などにより児童にイメージさせた。児童にとっては、学期末にできるようになることを予め知ることによって、学習意欲が向上し、授業に意欲的に取り組むことができたと考える。また、教員にとっては、「つけたい力」をつけさせるためには、いつ頃までにどの程度積み重ねていけばよいかという見通しを立てることができ、ゴールから立ち返り、毎時間の学習につながりを持たせることができた。パフォーマンス評価実施を目指して授業のデザインしてみたが、スタート段階でゴールの姿をイメージできることが、児童、教員双方にとって、有益であると感じた。



3 課題・今後の方向性

今回の実践は、英語教育推進員が5・6年生外国語科を担当する専科教員であったため、単独でルーブリックを決定し、パフォーマンス評価を行ったものである。判断の規準が抽象的であり、児童が規準を明確に理解しにくい点もあったように感じる。今後よりよいものとするためには、各項目に応じた規準を明らかにし、児童により具体的に伝える必要があると考えている。

本来、パフォーマンス評価を実施するにあたっては、どのような目的で、どのような項目で行うのか、評価する教員間で話し合いを重ねて決める必要がある。また、いつ、誰が、どのように評価を行うかについても検討していかなければならない。決定までには時間と労力がかかるものと思われるが、手順を踏むことにより評価規準がより明確なものとなっていく。そして、実施した上で問題があれば、改善を図ることもできる。

また、パフォーマンス評価に限らず、今後多様な評価方法を実施するにあたり、指導と評価の一体化は常に意識していかなければならない。目標で定めた能力を適切に評価していくことで、児童の学習活動の充実、教員の指導改善を図ることができるものと考えている。

多可町立中町南小学校



研究内容

- ・教科書に準拠したルーブリックによる評価のあり方について実施・検証
- ・授業で重点的に指導をした点を評価できるような課題の設定

1 具体の取組の内容

パフォーマンステストを実施する前に、教科書にある Can-Do List を基にルーブリックを作成した。単元の最初には、教員の見本を見せ、単元終末で児童が目指すべき姿がイメージできるようにした。毎回の授業は、単元終末の目指すべき姿をイメージさせながら、本時ではどこまで到達したのか確認して進めた。また、ALT とのリピート練習やチャンツなどで、単語や表現を十分に練習してから対話、発表練習を行い、スモールステップで児童ができることを実感し、自信をもって話すことができるよう単元を構成した。その単元で習った表現だけでなく、これまでに学習した内容も使って伝えられるよう指導した。

発表形式のテストは、「ALT に自己しょうかいをしよう」（6 年）、「身近な人を友達にしょうかいしよう」（5 年）、「行きたい国のみりよくをしょうかいしよう」（5 年）という課題を設定して行った。「ALT に自己しょうかいをしよう」ではパソコンで動画撮影をし、普段会えない 3、4 年を担当している ALT に名前や得意なこと、好きなものを伝えた。「身近な人を友達にしょうかいしよう」では、家族や友達の性格や得意なことを写真を使って発表した。「行きたい国のみりよくをしょうかいしよう」では班で紹介したい国を 1 つ決め、おすすめの場所や食べ物など、その国の魅力を写真を使って発表した。



6 年生は What did you do last weekend? I watched anime.、5 年生では Where do you want to go? I want to go to France. Why? I want to see the Eiffel Tower. といったやりとりをする際には、インタビュー活動をする前に、専科教員と ALT が個々に内容や発音を確認し、個別練習の時間を十分にとってから行った。

2 成果

ルーブリックを作成したことで、単元終了時や小学校卒業時に児童が目指すべき姿を明らかにすることができたので、単元計画を立てる際に何をどの授業で指導すべきか明確になり、有効であった。また、専科教員だけでなく、ALT や担任とも評価規準を共有できるので、複数の教員が評価しても一致させることができる。ルーブリックを児童用にしたもの、「行きたい国のみりよくをしょうかいしよう」の単元では、教員の見本を見せる際に提示した。評価の観点を教員と児童が共有することができ、児童は見通しをもって意欲的に学習することができた。

パフォーマンステストで設定した課題は、ALT や友達に対して紹介するものだったの

で、児童は聞き手の興味を引きそうな内容を発表に入れたり、A L Tに伝わるように英語の発音を練習したり、暗記したりするなど、相手への意識をもって、準備や練習に取り組むことができた。児童の振り返りからも、「緊張したけど、話すのが楽しかった」や「友達の発表を聞くのが楽しかったので、またやりたい」と、前向きに学習に取り組めたことが分かった。これらのことから、パフォーマンステストが、今後の英語の学習に対する意欲の向上にもつながるのではないかと感じた。

児童用のルーブリック

観点	学習した表現を使って発表できているかな？	相手に伝わるように、内容を考えてくわしく発表できているかな？	相手のことを考えて発表できているかな？
ポイント	() 当単元で学習した表現を使う	() 訪れるべきところ visit () 食べるべきもの eat () 見るべきもの see () 買うべきもの buy	() 相手に伝わる声の大きさ () 相手が聞き取りやすいスピード () 原稿を見ずに話す () 写真の活用
3	この単元で学習した表現だけでなく、これまでに学習した表現を用いて、適切に話すことができている。	その国の良さが伝わるように、おすすめの国の「訪れるべきところ」「食べるべきもの」「見るべきもの」「買うべきもの」を入れて話している。また、それについての理由を加えるなど、詳しく発表している。	相手に伝わりやすいように、声や目線などをとても工夫して発表しようとしている。また、相手の興味を促すように写真を活用している。
2	この単元で学習した言葉や表現を使い、適切に話すことができている。	その国の良さが伝わるように、おすすめの国の「訪れるべきところ」「食べるべきもの」「見るべきもの」「買うべきもの」を入れて話している。	相手に伝わりやすいように、声や目線などを工夫して発表しようとしている。また、写真を活用して発表している。
1	この単元で学習した言葉や表現を使っているが、間違いがある。	その国の良さが伝わるような発表をするのに苦労している。	声や目線など気を付けて話そうとしていない。

3 課題・今後の方向性

今年度は新型コロナウイルス感染症予防のため、パフォーマンステストを予定していたほど実施できなかった。普段の授業でも発音練習やスピーキング活動を十分に取り入れることができなかったため、パフォーマンステストの準備が十分であったとはいえない。来年度もコロナ禍での授業が予想されるが、対策を十分に取った上でスピーキング活動を行い、児童が学習したことを使える喜びを味わい、英語を話すことに対する自信をもてる授業になるように取り組んでいきたい。また、マスクをしてパフォーマンステストを行ったため、口の動きや表情が見えず、指導や評価に難しさがあった。来年度は、フェイスシールドの着用など対策を講じ、実施したい。

事前にルーブリックを作成していたが、より適切な評価となるように指導するのが難しかった。教員が提示した見本の一部を、児童それぞれが変えて発表の原稿を作成したが、自由度が低く児童自身がさらに付け加えるなどできなかったため、多くの児童がB評価でとどまってしまった。教員もどこまで手をいれるべきか加減が難しく、同じような発表内容になってしまった。毎回の授業の中で、児童が使える英語の表現を増やしておき、パフォーマンステストの準備をする際に掲示物などで提示し、学んだことを生かすことができるようにしておく必要がある。また、ジェスチャーや相づちなども、普段の授業から取り入れて、発表の時に使うことができるようにしておく。

今年度、パフォーマンス評価を実施し、小学校では授業で重点的に指導した内容を課題として設定し、評価するべきであると思う。しかし中学校との接続という観点を考慮すると、相手とのやりとりの際、「その場で」質問したり答えたりする力も必要であると考え。6年生では、発表の最後にA L Tからの質問に答えるなど即興でやりとりするものを1つ加え、小学校のまとめとして英語を聞いたり話したりする力がどれだけついたのか、評価する機会を設定すべきであると思う。

佐用町立上月小学校



研究内容

評価規準を明確にしたインタビュー活動やスピーチ等における肯定的かつ適切な評価

1 具体の取組の内容

記録に残す評価は『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料」（国立教育政策研究所）等を参考にした。



○ 単元半ば頃のインタビュー活動における評価

- ・ 知識・技能についてのチェックリストを作成し、評価した。

○ 単元後半から終末のスピーチ（個人発表、グループ発表）や、ペアでのやり取り等のパフォーマンス評価

- ・ 学期に1～2回実施。
- ・ スピーチやペアでのやり取りを年に2回程度動画撮影し、映像記録として残した。

○ 具体的な取組例

- ・ 単元 Unit5 Where is the post office?（5年生）
- ・ 単元のゴール ペット探し（教科書では道案内をゴールとして設定してあるが、児童の実態に合わせて変更した。）
- ・ 留意事項 ペア練習の際にペットの場所を先に知ってしまうと発表場面でのリアリティーが無くなるので、ペア練習の時間は設定せず、即興でのやり取りを発表する。
- ・ 展開 ペットの飼い主 $\boxed{X}$ とペットを見かけて居場所を知っている人 $\boxed{Y}$ （実際には、ペットの絵カードを預かり、自分が案内したい場所に隠している）に分かれてやり取りをした。

○ 具体的な評価例 1

$\boxed{X}$ Where is my dog? $\boxed{Y}$ It's in the park. $\boxed{X}$ Where is the park?
 $\boxed{Y}$ Go straight for one block. Turn right. Go straight for one block.
It's on your right.

◆ 思考・判断・表現⇒【go straight】・【turn】などを使って基礎的なやりとりができて
いるので、B

○ 具体的な評価例 2

$\boxed{X}$ Where is my rabbit? $\boxed{Y}$ It's in the zoo. $\boxed{X}$ Where is the zoo?
 $\boxed{Y}$ It's by the post office. You are here. Go straight for two blocks. Turn right. Go straight for one block. Turn left. Go straight for one block. Turn right. Go straight. **Cross the train tracks. You can see it** on your left.

- ◆ 思考・判断・表現⇒【go straight】・【turn】などの基本的な表現でのやりとりに加え、既習の表現を用いてよりわかりやすく伝えているので、A

2 成果

単元末のパフォーマンス評価は、全体場で発表することが定着したので、あまり自信の持てない児童や消極的な児童も、単元末には全体発表を必ずするという意識を持って、自分なりに単元末のゴールに向かって努力する姿が見られるようになった。間違っても言い直し、聞き取れなくても聞き返し、ペアで助け合いながらやり取りできた。より難しい表現に挑戦しようとする児童も現れ、時間はかかったが、より自然なやり取りができた。発表後の振り返りには、「他の動物探しもやってみたい。」や、ペット探しをして「道案内の仕方が分かった。」「うまくできるようになった。」等肯定的な振り返りを書いた児童が多かった。また、自分ではまだ上手に案内できないと思っている児童も、単元前半で道案内をするというゴールに対して難色を示したときと違い、「難しいからもっと道案内をしたい」、「外国語の道案内が苦手なので、もっとすらすら言えるようにしたい。」と主体的に学ぼうとする意欲を振り返りに書くように変化していた。



3 課題・今後の方向性

単元半ば頃のインタビュー活動では、その様子を行動観察で見取ったり、教員によるインタビューに答える形で知識・理解についての評価をしたりしている。しかし、それはロールプレイやパターン練習、インタビューに答えるだけの受け身で一方通行なものになりがちである。単元末で目指している「知りたい・伝えたい」という思いを持ったやり取りや発表に繋げるためには、高学年であっても児童用の絵カードを準備したり、思いを伝え合うやり取りを円滑に進めるツールとなるカードやポスター等を児童自身が作る時間を設定したりして、伝えたいという思いを引き出すことが大切である。

神戸市立外国語大学の横田教授からは、「授業終末の振り返り段階では、できるようになってきたこととまだ不安が残ることを児童自身が認識できるような指導者の声かけが必要である」と助言いただいた。今後も常に心に留め、児童の主体性を育む評価を心がけたい。

単元末のスピーチやペアでのやり取りでは、児童にとって十分な練習の時間と機会や場を保障したうえで、自信を持たせ、達成感を味わえる発表の場となるように配慮したい。そして、児童の頑張りや成長を評価者であるT1が認めたり褒めたりしながら、次への意欲や頑張りにつなげられるよう、全員の発表やパフォーマンスを見取る工夫をしたパフォーマンス評価をし、児童の意欲を高め、力を伸ばせるよう授業改善に努めたい。また、動画撮影し、映像記録として残すことについては、時期や内容を考慮して学期に1～2回程度の実施とし、児童に自信をつけ、さらなる成長に繋がるようにしたい。

香美町立兎塚小学校



研究内容

- ・外国語の5つの領域と新学習指導要領が示す評価の3観点との関係を踏まえた評価方法
- ・児童の学ぶ意欲へとつながるパフォーマンス評価の在り方

1 具体の取組の内容

(1) 外国語学習の評価の在り方と考え方について

「小学校外国語教育の評価の在り方と考え方」について、『小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック』を参考にして研修を行った。

評価の基本的な考え方としては、

- 観点別の3観点「知識・技能」、「思考・判断・表現」、「主体的に学習に取り組む態度」で評価する。
- 単元や題材を通じたまとまりの中で、学習・指導内容と評価の場面を適切に組み立てる。
- 評価規準を作成し、見取っていくために必要な手順を示す。
- 多様な活動に取り組ませるパフォーマンス評価などを取り入れ、ペーパーテストの結果だけに頼らず、多面的・多角的な評価を行う。
- 「主体的に学習に取り組む態度」については、学習に関する自己調整を行いながら、粘り強く知識・技能を獲得したり、思考・判断・表現しようとしたりしているかどうかという、意思的な側面を捉えて評価する。

(2) 外国語科の評価方法について

具体的に、いつ、どのように評価をするのかを考えるために、『“CROWN Jr.” の評価資料集』を参考に、以下の研修を行った。

- 評価の具体的な方法
- 「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の評価の考え方
- 評価資料から観点別学習状況の評価を総括する方法

これらを参考に、パフォーマンス評価も含めてどの方法が適切か高学年を中心に1学期に取り組み、2学期に振り返りを行った。

- ・「主体的に学習に取り組む態度」の評価が難しい。
⇒ゴールを明確にして児童に目標を持たせ、そこに向かおうとする態度（変容）を見取るようにする。
- ・担任一人では見取りにくく、ALTとの協力が必要である。
⇒児童が名札をつけるなど児童の名前が分かるようにして評価の共有を行う。

(3) パフォーマンス評価とルーブリックについて

パフォーマンス評価やルーブリックについてだけでなく、パフォーマンス課題の留意点やルーブリックの作成手順についても研修を行った。

パフォーマンス課題については、つけたい力は何か（目的）を明確にし、そのために

どんな内容にするかを児童の興味を考慮しながら考え、意欲的に取り組むことのできる課題を設定することが重要だと分かった。

ループリックについては、規準表は作成しないが、「B：おおむね満足できる」を設定し、評価していくことを共通理解した。

(4) 授業研究の中での評価活動

本校では、中・高学年の学年別に外国語学習学習到達目標を設定し、外国語学習に取り組み、授業研究を行った。評価については、どの学年も目標を明確にして授業を組み立て、授業の途中で活動を振り返ったり、ICT機器を活用したりして、自己評価だけでなく他者評価も取り入れるなど、様々な評価方法にチャレンジしながらその効果を検証していった。



2 成果

英語教育改善プラン推進事業の指定を受け、「外国語の学習を通して、主体的にコミュニケーションを図ろうとする児童の育成」をテーマとして、研究をする機会をいただいた。全担任が英語の授業を行い、パフォーマンス評価も含めて評価方法について研究を行い、共通理解を深めることができたことが何よりの成果だと考えている。

実際の評価について様々な方法に挑戦し検証していく中で、以下のような成果を得ることができた。

- 「知識・技能」、「思考・判断・表現（聞く）」については、ペーパーテストや振り返りシートである程度見取ることができた。
- 個人の発表や少人数のやり取りは、ビデオなどICT機器を活用することで、児童も教員も振り返りや評価に活用することができた。
- 発表の評価をする際は、児童に評価規準を示し教員がよい見本を見せてから児童に発表をさせる。発表後、その場で評価することで、児童の意欲が向上した。

3 課題・今後の方向性

課題としては、以下のことがあげられる。

- 「主体的に学習に取り組む態度」の評価が難しい。ゴール（目標）を明確にして児童と共有することや振り返りシートを工夫する必要がある。
- パフォーマンス評価については、妥当性や信頼性を確保するためにもループリックの作成が必要である。
- 授業はALTと行うため、評価もALTとともに行うのが望ましい。ALTと協力をして評価していくために、いつ、だれがどこで評価するのか役割分担をするなど、評価の体制づくりが必要である。

今後は、指導と評価の一体化を図る上で、評価の時期と方法を検証すると同時に、評価の妥当性や信頼性を確保するための方法を確立していく必要がある。また、教員や児童の負担にならないように、ループリックを用いて評価を行う単元を選択し、よりよいものに改善しながら、くり返し使えるものを作成していくことが大事である。そのための方策を今後とも研究していきたい。

新学習指導要領に基づく指導方法の工夫

香美町立兎塚小学校

研究内容

児童の学びに向かう力の育成に向け、中学年で「聞くこと」「話すこと」を、高学年では「読むこと」「書くこと」を加えた5つの領域の言語活動を通したコミュニケーション能力の育成を図る指導方法

1 具体の取組の内容

(1) 新学習指導要領に基づく外国語学習を通して育てたい児童像の共通理解

中学年：コミュニケーションの中に英語を取り入れようとする児童

（音声を中心とした外国語を用いたコミュニケーションの素地となる資質・能力を育成する。）

高学年：慣れ親しんだ英語を使ってコミュニケーションを図る児童

（コミュニケーションを図る基礎となる資質・能力を育成する。）

(2) 外国語学習の授業づくり

①「授業のスタンダード」の作成（右の資料参照）

②「小学校外国語教育指導用映像資料」を活用した研修

DVDを見て気付いたことや各自が取り組みそうなことを出し合い、本校で取り組む内容を決めた。そして、指導者自身が授業内で使える英語力を身に付けるため、職員朝会後にALTによるClassroom Englishのワンポイントレッスンをを行い、授業に取り組んでいった。

③カードやデジタル教材を活用した教材研究・模擬授業

導入やウォーミングアップにおいて、短時間で英語に触れることができるMissing gameやSound tennis、Small talkを扱う模擬授業を行った。また、復習で活用できるフラッシュカードやデジタル教材を作成することで、各学年の児童の実態に合わせた指導に取り組んだ。

④授業研究および外国語研修

研究テーマや育てたい児童像を目指して授業に取り組み、事後研究会の中で振り返りを行った。また、大阪教育大学の箱崎雄子教授をはじめ、教科等指導員や県教育委員会の指導主事を招聘し、授業の指導助言をいただき、「英語学習の基本的なすすめ方」などについて学んだ。

Regular English Classes at UZUKA elementary School	
ROUGH TEACHING PLANS for Today (英語小学校の外国語学習 概要)	
Day (曜日) & Date (日付):	
Class (クラス):	
Today's goal (今日のめあて):	
Procedure (手順 ※授業の流れ):	
① Greeting (はじめのあいさつ)	③・④年: Let's start. (Let's start.) ⑤・⑥年: Let's start our English class. (Let's start our English class.) ※Feeling (体調) / day (曜日) / date (日付) / weather (天気) / time (時間)
② Warm-up time (ウォームアップタイム) / Review time (復習タイム)	※to try jingle (ジャンглに挑戦する) ※small talk (スモールトーク) ※to count numbers with rhythm (リズムに合わせて数を数えさせる) ※to check numbers at random (ランダムに数を確かめる) ※to introduce ordinal numbers (序数を紹介するーはじめての学習) ※to review vocabularies (既習の単語を復習する)
⑤ ALT time (ALTタイム) / Step-up time (ステップアップタイム)	※ALTによるプレゼンテーションやゲームなど
④ Today's goal (今日のめあて)	
⑥ Textbook time (教科書での学習)	※to practice the chant (or the song) (チャンツや歌を練習する) ※to try listening (聞き取りに挑戦する) ※to try interview game (インタビューゲームに挑戦する) →友だちと交流する活動
⑦ Reflection time (振り返り)	※3～6年生共通のワークシート? (⑤・⑥年は教科書付属のワークシートがあるがー)
⑧ Farewell (終わりのあいさつ)	③・④年: Let's finish. (Let's finish.) ⑤・⑥年: Let's finish our English class. (Let's finish our English class.)

2 成果

「授業のスタンダード」を基本として授業づくりに取り組んだことで、よりよい授業について教員間で意見交換を行うことができた。それによって児童も見通しを持ち、安心して授業に取り組む様子が見られた。また、外国語の授業の中での言語活動の意義やその在り方について教員で共通理解できたことも、研修を通して得た大きな成果である。そのためには、コミュニケーションを行う目的・場面・状況を設定することが大切である。そして、主体的な学習にするためには、①相手意識を持つこと、②必然性があること、③本物の活動にすること、④コミュニケーションの楽しさや意義、達成感を感じることで活動にしていける必要がある。児童の学びに向かう力を育成するために、この視点を持って指導方法を研究することができた。

3 課題・今後の方向性

- 中学年から高学年の縦のつながりを意識し、4年間を見通した指導の研究を進めるとともに、中学校への接続を意識した取組が必要である。
- 授業のスタンダードの継承と更なる改善を行う。
- コミュニケーション活動および言語活動に取り組む際は、ねらいを明確にする。

新学習指導要領に基づく指導方法の工夫

佐用町立上月小学校

研究内容

友達やA L Tと目的をもって、楽しく、互いの考えや気持ちを伝え合う活動

1 具体の取組の内容

(1) 外国語の授業の約束

相手に伝わるように話すこと、相手の言葉を聞いて反応すること、安心して間違い助け合うこと等、授業の約束を子ども達と確認してから学習を開始した。



(2) 単元導入段階での単元ゴールの共有

授業では、主人公たちの会話や発表場面をデジタル教科書で視聴し、ゴールのイメージをつかませ、他教科や行事等とも関連づけながら単元のゴールを児童と共有した。「相手に伝えたい」「相手のことを知りたい」と思えるような場面を設定するようにした。

(3) デジタル教材の有効活用

デジタル教材の歌・チャンツ・画像等を通して身体全体で音声による英語表現に出合わせ、児童用絵カード・プレゼント作成用紙やカード・拡大絵地図等を準備して児童の意欲づけを図り、やり取りの場面を明示した。

(4) 具体的な取組例

- 友達に文具セットを作ってプレゼントするための買い物をする（４年）
- レストランで栄養バランスを考えた食事を注文する（５年）
- 班の友達と共に興味のある動物の食物連鎖について調べて発表する（６年）
- 自然学校でのピザ作り（５年）や家庭科の３食品群の学習と関連づけ（５・６年）

2 成果

理科で学習した食物連鎖を発展させて、班の友達と共に興味のある動物の食物連鎖について調べて発表する活動（６年）では、班の仲間との学習を楽しみ、会話形式やクイズ形式にして Where do crabs live? - Crabs live in the river. -What do crabs eat? -Crabs eat killifish. というやり取りを続けながら紹介する班も出てきた。限られた時間であったが、調べた内容を友達に英語で伝えたいという思いが強く、友達と分担・協力して和英辞典で調べ、自作ポスターやジェスチャーをつけて伝えようとする姿や既習表現を使って反応したり、さらに会話を続けたりしようとする姿も見られるようになった。

3 課題・今後の方向性

児童の伝えたい内容をメモや原稿に書くことにより、伝え合う活動がコミュニケーションから遠ざかり音読や暗唱の発表になってしまうことがある。書く活動は互いの考えや気持ちを十分伝え合った後に入れる等、指導場面や時期を工夫する必要があると考えている。

学びの接続を意識した小中連携

多可町立中町南小学校

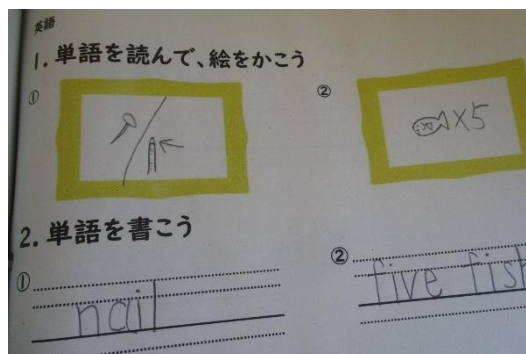
研究内容

- ・ フォニックスを活用した音声から文字の学習につなげるための指導方法
- ・ 中学校教員に対する小学校での学び（目標や指導内容、指導方法）の共通理解

1 具体の取組の内容

文字指導（読み書きの指導）における小中のスムーズな接続を図るため、「はじめてのジョリーフォニックス」（東京書籍）を活用し、帯活動として音と文字の関係の指導をしている。6年生は42音の指導を終え、単語を読んで絵をかく活動も取り入れ、音と文字、意味を関連付けて教え、児童が自分で読み、書けるようになるよう取り組んでいる。

また、中学校教員との連携については、11月30日に実施した中町北小学校での研究授業に、町内3中学校から英語担当に参加してもらい、小学校における指導について共通理解を図る機会をもった。



2 成果

フォニックスの指導を通して、多くの児童が文字を見て音が分かっている。初めて見る言葉であっても、フォニックスのルールを使って読もうとしており、読む活動に対して前向きに取り組んでいる姿が見られる。6年生では多くの児童が、ALTが発した3音程度の単語を聞き、正しく書くことができている。さらに、3音程度の単語を読んで絵をかく活動を取り入れたことで、児童が自分で音を読み、組み合わせ、意味を考えており、音と文字、意味を関連付けられるようになってきている。

中学校教員との連携については、研究授業の際に中学校の英語担当にも声をかけ、授業参観をしてもらい、授業の流れや指導方法について知ってもらうことができた。事後研修では、フォニックスの指導をどのように行っているのか、アルファベットをどの程度書けるのかなどについての情報を共有することができた。

3 課題・今後の方向性

小学校で指導している42音のみでは、教科書で使用されている英単語の約40%しか読めるようにならない。そのため、中学校教員にもジョリーフォニックスの指導方法を広め、小学校は基礎の42音を教え、中学校では発展的な内容を指導するなど、小中の7年間で指導をする体制を町内で進める必要がある。

中学校教員との連携については、指導目標や指導内容などまだ共通理解しきれていない部分が多い。今後も研究授業の際に中学校教員に声をかけ、さらなる連携をしていきたい。年度末には、中学校教員との引き継ぎを計画しており、小学校での学びが中学校へスムーズにつながるように、今後も継続的に取り組んでいく必要がある。

教員の英語力向上に向けた取組

西宮市立甲子園浜小学校

研究内容

全教員で外国語学習に関わり、児童とともに学ぶ取組

1 具体の取組の内容

本校では英語教育推進員が専科教員として、4年生の外国語活動、5・6年生の外国語科を担当した。一般的に、専科教員は教材研究に多くの時間を割くことができ、専門性を生かして指導を実施できるメリットがある。一方、校内のその他の教員にとっては、当該教科の学習に関わる場面がほとんどなく、専科教員によってどのような指導がなされ、児童がどのような活動を行っているのか知る機会を持ってないことが多い。そこで、5年生2学期の外国語科において児童が教員にインタビューをする活動を設定し、全教員で外国語学習に関わることとした。インタビューする児童、インタビューの結果を聞く児童それぞれが興味を持って取り組める活動でもあり、実際に英語を使って大人とやり取りする経験は価値のあることと考えた。職員会議でインタビューの趣旨や日時を伝え、児童が学習している語句や表現を伝達した。また、英語を使うモデルとして、はっきりと大きな声で回答すること、インタビューのよかった点やアドバイスを児童に伝えることを依頼した。

2 成果

外国語活動・外国語科の指導に関わらない教員が活動に興味を持ち、当日は快く児童のインタビューに答える姿が見られた。回答するだけでなく、児童に聞いてみたいことを尋ねたり、自分から情報を与えたりするべく、事前に英語の表現を確認してから臨む教員もいた。一方、児童には、2学期の学習を始めるにあたり、ゴールとなる活動を「みんなで分担して、たくさんの先生にインタビューをすること。そして、インタビューで得た情報をもとにして、その先生について学級 みんなに紹介すること」と伝えた。2学期の学習を通して、自分のことについて伝え合うためのやり取りに必要な表現に慣れ親しませ、自信を持って活動に取り組めるようにしてきた。「〇〇先生と英語で話してみたい。」「みんなに〇〇先生のことを教えたい。」という気持ちを児童が持てたことで、学習への意欲が向上し、活動がより豊かなものとなった。



3 課題・今後の方向性

教員にとっては、全教員が外国語学習に触れ、直接的に児童の指導に関わったことで、外国語学習への意識が高まったと考えられる。しかし、児童とのやり取りで使う語句や表現は非常に限られたものであり、英語力向上に即座につながるものとは言い難い。ただし、このような経験が契機となって外国語学習に関心を持つことは、教員の英語力向上を図る上で必要不可欠なものとする。今後も教員を巻き込んだ学習活動を取り入れていきたい。

「小学校外国語教育指導用映像資料」について

1 作成の趣旨

兵庫県教育委員会では、外国語の教科化に向け、5・6年生の外国語に対応した映像資料及び教師用指導資料を作成し平成30年度末に配付しています。

本映像資料は、各教育委員会や学校において、小学校外国語の教科化に向け、効果的な指導の在り方について研修を深めていただくために、新学習指導要領対応小学校外国語教材「We Can! 1 及び 2」(文部科学省)を活用し、新たに追加された領域である Reading・Writing につながる指導及び音声コミュニケーション指導についてのモデル授業をまとめています。

また、個々の活動だけでなく、単元全体のつながりが分かる構成としています。単元やそれぞれの授業で、「児童にどのような力を身に付けさせるために、その活動が行われているのか」等も意識しながら活用いただければと思います。

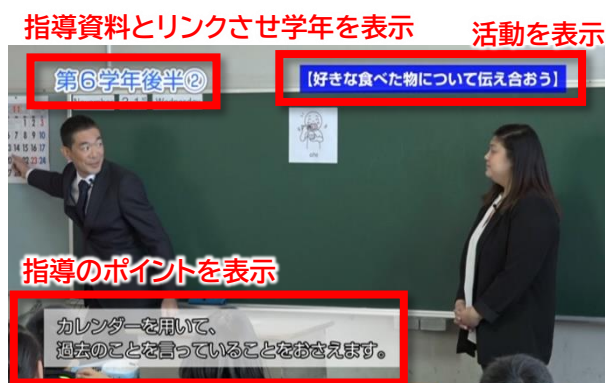
コンセプトは

**外国語教育を得意とする教員しかできない指導ではなく、
だれもがチャレンジできる指導！**



小学校外国語教育指導用映像資料 DVD

2 映像資料について



DVD 後期6年生後半②より

本映像資料には、学年等に応じた効果的な指導が比較できるように、教科化としての導入期(5年生前半)、中期(6年生前半)、後期(6年生後半)の各1単元分(各4時間)の授業が収録されています。各授業(45分)を10～15分程度にまとめ、個人での視聴や短時間での研修に対応できるように編集しています。また、各活動における指導のポイント等の効果的な指導の在り方を映像中に示しています。

区 分	内 容	収録時数
導入期(5年生前半)	We Can!1 Unit-2 When is your birthday?(7時間構成)	4／7時間
中 期(6年生前半)	We Can!2 Unit-3 He is famous. She is great.(5時間構成)	4／5時間
後 期(6年生後半)	We Can!2 Unit-7 My best memory.(4時間構成)	4／4時間

※全ての時間ではなく、特に重要な時間のみを取り上げている単元もあります。

3 教師用指導資料（小学校外国語教育指導用映像資料～活用にあたって～）について

映像資料をより分かりやすく、より効果的に活用していただくために、教師用指導資料も作成しています。指導資料では領域の系統性を示すとともに導入期・中期・後期のそれぞれの単元について指導のポイントを解説しています。各単元の指導のポイントでは映像資料に実際に収録されている場面にそって活動内容や指導上の留意点を解説しているので実際に授業を行うときに参考にすることができます。また、教育委員会が研修等で活用する場合には押さえるべきポイントが分かりやすく示され、より効果的な研修を行うことができます。

小学校外国語教育指導用映像資料 ～活用にあたって～	
目次	
I 活用にあたって	1
II 領域の系統性	2
III 導入期（5年生前半）	3
(1) 導入期	3
(2) 指導のポイント（2/7時間）	5
(3) 指導のポイント（3/4時間）	6
(4) 指導のポイント（4/5時間）	7
(5) 指導のポイント（5/6時間）	8
IV 中期（6年生前半）	9
(1) 中期	9
(2) 指導のポイント（2/3時間）	10
(3) 指導のポイント（3/4時間）	11
(4) 指導のポイント（4/5時間）	12
(5) 指導のポイント（5/6時間）	13
V 後期（6年生後半）	14
(1) 後期	14
(2) 指導のポイント（2/3時間）	15
(3) 指導のポイント（3/4時間）	16
(4) 指導のポイント（4/5時間）	17
(5) 指導のポイント（5/6時間）	18

兵庫県教育委員会
～Hyogo Prefectural Board of Education～

領域ごとの系統性について	作成コンセプト	段階	学びのねらい	活動
導入期（5年生前半）	5年生前半	1	「決めたことを実行する」	「決めたことを実行する」
		2	「決めたことを実行する」	「決めたことを実行する」
中期（6年生前半）	6年生前半	3	「決めたことを実行する」	「決めたことを実行する」
		4	「決めたことを実行する」	「決めたことを実行する」
後期（6年生後半）	6年生後半	5	「決めたことを実行する」	「決めたことを実行する」
		6	「決めたことを実行する」	「決めたことを実行する」

単元構成について【中期：6年生前半】
1 単元名 We Can't (Unit 3 - He is famous. She is great - 人物紹介)
2 目標および構成
(1) 目標
(2) 構成
1 導入期
2 中期
3 後期
4 導入期
5 中期
6 後期

導入期 5年生前半 単元名: When is your birthday? Unit-2 (We Can't) (2/7時間)

本時のねらい

1 月を指し示す表現の活用ができるようになること、日付の言い方を覚える。

【収録されている活動】

- 【Warm-up をしよう】
- 【アルファベットを覚えよう】
- 【日付の言い方を練習しよう】
- 【月日の言い方を覚えよう】
- 【月日の言い方を練習しよう】
- 【月日の言い方を練習しよう】

領域ごとの系統性について

単元構成について【中期：6年生前半】

指導のポイント【導入期：5年生前半】

なお、義務教育課サイトには教師用指導資料（活用にあたって）や映像資料の中で使用しているワークシート等を掲載しています。ダウンロードしていただき、映像資料と併せて活用してください。

4 活用にあたっての留意事項

(1) A L Tの活用について

本映像資料におけるA L Tの活用方法は一例に過ぎません。十分な打合せを行い、役割分担を明確にし、効果的な活用をお願いします。

(2) 教員の英語の使用量について

教員の英語の使用量については児童の実態に合わせ、配慮する必要があります。本映像資料については、全ての教員を対象に作成していますので、日本語を多めに使用しています。各学校においては、児童が英語に触れる機会を充実し、授業を実際のコミュニケーションの場面とするために、児童の実態に合わせ、教員の英語の使用量を徐々に増加させることが重要です。

(3) DVDの取扱いについて

著作権の関係上、WEBへの掲載は禁止します。また、映像中に児童の顔等が撮影されている部分があるため、肖像権の関係上、取り扱いには十分注意願います。

中学校教員に対する研修

急速にグローバル化が加速する現状を踏まえ、初等中等教育段階からコミュニケーション能力、主体性・積極性等を身に付けて様々な分野で活躍できるグローバル人材の育成が重要です。そこで、小・中学校を通じた英語教育を強化するため、コミュニケーションを中心とした指導方法を普及するとともに、学びの接続を意識した外国語教育における小中連携の研究を行い、新学習指導要領実施に向けた教員の授業力向上に取り組むために、兵庫県教育委員会では『英語教育強化事業』を実施しています。事業のうち小学校では『英語教育改善プラン』を実施し、中学校では『英語科の授業改善少人数グループ研修』を実施しています。

英語科の授業改善少人数グループ研修

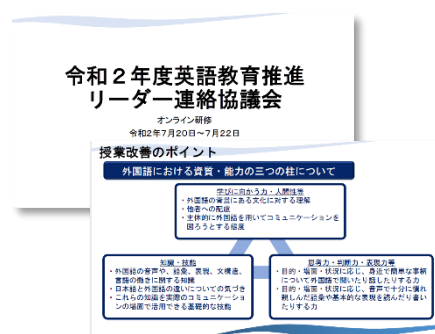
英語教育実施状況調査によると「授業における、生徒の英語による言語活動の割合（50%以上）」については、本県の中学校は、全国平均を約10%下回っている状況が続いており、言語活動の実施に課題が見られています。そこで、英語教育推進リーダーを講師とし、新学習指導要領や全国学力・学習状況調査（英語調査）を踏まえた英語科における授業改善のポイントについて実践研修を実施する少人数グループ研修を実施しています。

(1) 英語教育推進リーダー研修会

対象者：英語教育推進リーダー

実施回数：1回

実施内容：新学習指導要領や全国学力・学習状況調査（英語調査）を踏まえた授業改善のポイントについての、少人数グループ研修の実施に向けた研修



(2) 少人数グループ研修

対象者：中学校英語科教員（初任者研修対象者を除く）

実施回数：少人数グループ×2回

受講計画：令和元年度～令和3年度（3年間）

受講対象者

年度	令和元年度	令和2年度	令和3年度	計
対象者	329	306	239	874

少人数グループ研修は各教育事務所が運営を行い2回実施しています。1回目は英語教育推進リーダーによる講義やグループ協議を通して授業改善のポイントについて実践的な研修を行いました。2回目は1回目の研修内容を反映させた各受講者の授業実践について協議し、指導力の向上を図っています。

第1回英語科の授業改善少人数グループ研修の様子



英語教育推進リーダーによる講義

最初に英語教育推進リーダーが「言語活動の充実を目指した授業改善について」と題して講義を行いました。学習指導要領の改訂のポイントや本年度から教科化された小学校の外国語教育を踏まえた指導内容等について理解を深めました。

講義後は単元を通した帯活動を考える演習を行いました。

【成果】

- 演習では、日常の自分の授業について、授業改善の視点で交流することができた。
- 小グループで話し合い、単元や本時案の中に、毎時、複数回の（自分の言葉で話す）言語活動を取り入れたアウトプット活動案を作成することができた。
- グループ20名が5つの小グループに分かれることで、より主体的に研修に参加し、積極的に協議することができた。
- 参加型研修においては、「到達目標を明確にしたバックワーズ的な単元計画」又は「言語活動を繰り返し行う帯活動」のどちらかをグループ毎に選び協議を行った。

第2回英語科の授業改善少人数グループ研修の様子

第1回の研修後に各学校で行った実践を持ち寄り4名程度のグループで協議を行いました。授業実践を聞くだけでなく、お互いに意見交換の時間が十分に取れ、率直な協議ができ、実りある研修となりました。また、会場によっては、各校での実践を撮影して持ち寄り、実際の指導を見ながら意見交換を行いました。



少人数グループでの協議

【成果】

- 第1回目に立てた授業実践案をもとに、実際に授業を行ったことにより、一人ひとりが成果と課題を持つことができた。
- 実践した授業の映像資料を持ち寄ったことにより、授業の雰囲気や生徒の表情等も伝わり、授業の成果を共有することができた。
- 実践交流を行う時間を設定したことにより、多様な言語活動についても学ぶことができた。
- 授業実践の交流を通して、生徒の興味・関心を高めたり、即興性のある会話にしたりするための工夫について共有を図り、言語活動の充実を目指した授業づくりに向けた研修ができた。
- コロナ禍ではあったが、グループ協議の時間が十分にとれてよかった。

英語教育の充実に向けて

(英語教育改善プラン研究のまとめ)

令和3年(2021)年3月発行

編集発行 兵庫県教育委員会